

コハクチョウの故郷チャウン湾を訪ねて

長谷川 博

初めに申し上げます。皆さんに怒られるかも知れませんが、私がコハクチョウを、間近に見たのは去年が初めてでした。日本白鳥の会が創立15年だと会長さんが言われましたが、皆さんが永い間一生懸命にコハクチョウの保護活動をやってくられたのに、私がチャウン湾で繁殖するコハクチョウを見て申し訳ないような気がしています。チャウン湾から帰ってから私はコハクチョウ類の知識を得ようと島根県の中海や新潟県の瓢湖、福島潟、佐潟、宮城県伊豆沼、北海道浜頓別のクッチャロ湖へと出かけました。

私は昨年7月8日に成田を立ちました。皆さんはよくご存じだと思いますが、行ったところは東シベリア海に面したチャウン湾沿岸のツンドラ地帯です。位置的には北緯68.5°から70°位のところです。7月の中旬でしたがチャウン湾には流氷がまだ残っていました。ペベクの町から大型ヘリコプターでチュクチ遊牧民の村をすぎ、さらに南へ行きました。

この地方には低地ツンドラが広がり、短い夏の間だけ地表の数十cmまで土が解け、そこに地衣類、コケ類、草本植物、矮性化したヤナギなどの植物が生育します。チャウン湾にはマガダン州立の北方生物問題研究所があります。5月中旬から9月にかけてツンドラの生態系に対する人間への影響について調査研究しているそうです。当時16人の研究者と、その家族がいました。夏休みを利用して来ている研究者の子供たちも来ていました。

山から流れる川が蛇行を繰り返して、湖や池、沼、水溜りを形成している。そのような場所がコハクチョウの繁殖地でチャウン湾の沿岸が主な繁殖地で内陸に入ると見られなくなります。最初にヘリコプターから100羽以上のコハクチョウが集合しているところを見ましたが、ほとんどが繁殖していない成鳥や垂成鳥のようで、換羽のため集まっているようでした。コハクチョウは6月から7月にかけてチャウン湾で繁殖し、湖沼や川が凍結する9月下旬には南へ渡ります。

チャウン湾の北方生物問題研究所の女性研究者(タビネズミの研究をしているとのことでした)の案内でコハクチョウの巣を調べに行きました。この巣のコハクチョウはすでに孵化した後でした。さらに2時間くらいかけて他の巣を探し、ついに抱卵しているコハクチョウを発見しました。体を低くして近づくと、親鳥は「シュー、シュー」という声を発して私を威嚇しました。巣をのぞくと卵が5個ありました。巣は周りより少し高いところに、地衣類やコケ類、枯れ草などを集めて作ってありました。

7月の初めは蚊が大発生します。抱卵中コハクチョウは刺されていました。また、湖沼ではその蚊がコハクチョウが食べていました。皆さんはコハクチョウを呼ぶことがあると思いますが、私も「コーイ、コーイ」と呼んでみたところ25m位の近くまで近づいてきました。

短期限の滞在だったので、コハクチョウの繁殖生態を調査することはできませんでした。この地域のコハクチョウの繁殖生態の研究はコンドラチェフさんによって行われ、その論文が『日本の白鳥』(1987年)に藤巻裕蔵先生の翻訳でのっています。それを参照してほしいと思います。

コハクチョウ以外にもセグロカモメ、クビワカモメ、シロカモメ、トウゾクカモメ、キョクアジサシ、ハマシギ、ダイゼン、メガネケワタガモ、コオリガモなどたくさんの鳥類を見ることができました。

この旅の紀行文を「アニマ」動物雑誌1988年1月号に発表してあります。興味をもたれた方は、それを見てほしいと思います。